

改訂版 監修の言葉

ポケットサイズで、日常臨床に役立つとご評価をいただいてきた糖尿病治療薬ハンドブックの発刊から3年を迎え、改訂が必要となつた。DPP-IV阻害薬、GLP-1受容体作動薬が臨床に登場したことがその理由のひとつであろう。これらの薬剤は、糖尿病治療の大きな目標である動脈硬化性疾患の制御のために有用と考えられる作用特性を有しており、大変期待されている。ただし、糖尿病患者の病態は一例、一例異なり、それぞれの患者の病態を考えながら治療することが重要である。

最近、糖尿病患者におけるインスリン治療が、体重の増加を招き、低血糖を誘発し、動脈硬化を進展する可能性があるとの危惧のもと、インスリン療法をインクレチニン療法へ切り替える試みが日本で多くなされた。その結果、糖尿病性ケトアシドーシスを発症した症例が相次いで報告された。これは慢性合併症の征圧をねらった試みであったと思われるが、最新の治療を取りいれたために、皮肉なことに、インスリン療法により90年以上前に征圧したはずである糖尿病の急性合併症を発症させてしまった事例と解釈できる。

この例のように、糖尿病治療に関しては、個々の患者の病態、状況に合った治療法が必要である。本書は、最新の糖尿病治療をテーマに、さまざまなケースに対応できるように、その項目に最も経験豊かな専門家に執筆を賜った。本書が、読者の診療の向上を介して、糖尿病患者の予後改善に役立てば幸甚である。

2012年1月

綿田裕孝
河盛隆造